

無料・低額診療事業を利用している福井市の女性(59)の健康保険証は、有効期間が通常より短い6カ月だ。保険料の滞納で保険証を失った時期もあったが、いまは毎月数千円ずつ納めて短期証ではない。

重い糖尿病の夫(65)と、ぜんそくを患う30代の長男、自宅に引きこもりがちな20代の次男の4人家族。女性自身も足腰が悪く、満足に出歩けない。「まだ働かなければいけない年齢なのに、家族に申し訳ない」と漏らす。

長男は1歳半で発症して以来入退院を繰り返した。「数え切れないほど入院し、払いきれない費用が積み上がっていった」。長男を院内学級に通わせるため、18年前に福井市に引っ越した。30年余り建築関係の仕事に就いていた夫もそのとき退職した。夫は福井で仕事を探したが、定職は見つからなかった。

女性は清掃のパートを始めだが、収入はわずかで親族から借金をしてのりだ。長男がアルバイト先のコンビニから捨てる弁当を持ち帰り、家族で食べた。ガスや水道を止められたこともある。

本日は毎月受診が欠かせない

# 費用重荷で持病悪化

## 支援受けやっとな治療

長男は、費用を気にして年2、3回行くだけで、必要はかたくなに首を振り、2時な検査を全て断っていた。せめて聞近く押し問答を続けた。そんな重荷化してからの受診、入院を迫られて、また費用がかかる悪循環だった。2014年、働いていた

それでも「4人の食費は1日2千円で収まるようにやりくりしている」。病状が落ち着いて入院が減った長男はアルバイトを休むことが少なくなり、家計が苦しい時は支えてくれる。夫と次男も新聞配達を続けている。少しずつ状況が改善し、医療費の自己負担分を半額支払う形になった。

るから血糖値が高かった夫の病状が一気に悪化した。健康の度に治療が必要と指摘されていたが、一度も受診してなかった。診察した医師は異常な血糖値に驚き、「おす失

家族3人分の薬代は同事業の対象外。夫は近々、血糖値を抑えるインスリン注射を始め、生活の厳しさは変わらぬ。女性の年金が支給されない。女性の年金が支給されるようになるのはまだ先だ。

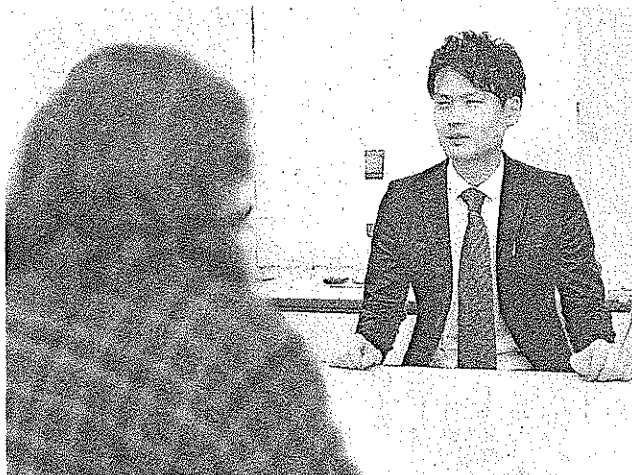
(西脇和宏)

### 厳しい老後、無縁ではない

「働いている時は、老後がこんなにも苦しくなるとは思っていませんでした。取材に応じてくれた」。取材に応じてくれた低年金の高齢者の多くは、長年勤め上げ、年金や医療保険の保険料をきちんと納めていた。それでも家族の死や病気をきっかけに、必要な医療すら受けられない状況に陥った。特異な例ではなく、誰にも可能性はある。現役世代にも無縁な話ではない。

政府は消費の下支えを目的に、低年金の高齢者に対する3万円の臨時給付金を6月までに支給する。対象者は生きるのに精いっぱい、確かに大部分は消費に回るだろう。しかし、1回限りの支援で長い老後は到底支えられない。

無料・低額診療事業は、あくまで生活が改善するまでの一時的な措置だ。2014年度から同事業



無料・低額診療を受けている医療機関で、治療や暮らしについて相談する女性(左)＝福井市の光陽生協クリニック

2/18 福井

(西脇和宏)